

『醫語類聚』(1873)から見る《醫學英華字釋》(1858)の影響
—共有する語基からの考察を中心に—

藤本 健一

FUJIMOTO Kenichi

目次

1. はじめに
2. 『醫語類聚』と《醫學英華字釋》に共通する語基
 2. 1 1字語基 151個
 2. 2 2字語基 234個(漢語語基のみ)
 2. 3 2字の和語語基 8個
3. 『醫語類聚』と《醫學英華字釋》より早い用例
4. おわりに

参考文献

1. はじめに

奥山虎章『醫語類聚』(1873)とホブソン(Benjamin Hobson、中国名:合信)《醫學英華字釋》(1858)は日中それぞれにおいて最初の英和、英華対訳の医学用語集であり³、特に《醫學英華字釋》は中国においては近代医学用語集の先駆けであり、非常に研究価値が高い。《醫學英華字釋》に言及した研究であっても、その語彙を全面的に調査、考察を加えたものは未だ管見にして確認できていない。

本稿では『醫語類聚』の「語基」を基準に、両書に共通の語基を考察することで、19世紀中ごろの日中で使用された医学語彙の様相を知ることができると同時に、当時において日中相互に影響関係が存在していたかを究明する手がかりにもなると考えている。

後述のように、両書に共通する語基は中国語の既存語がほとんどであり、近代新語の可

¹ 扉では英語と日本語書名を併記し、上に *A Medical Vocabulary in English and Japanese* と、下に 醫語類聚とあり、本稿では『醫語類聚』と表記する。

² 扉に記された書名は *A Medical Vocabulary in English and Chinese* であり、本文の前に「醫學英華字釋」と見え、本稿では《醫學英華字釋》と表記する。

³ 日本において『醫語類聚』以前に医学系の用語集としてラテン語との対訳ものや解剖学用語に特化した『解体字語箋』(1871)などがあった。

能性を有するのは29語と限定的である。さらに、その一部は《醫學英華字釋》(1858)や『醫語類聚』(1873)より前の用例を確認でき、ほかにも日中同形異義語で、偶然にも語形が一致したと思われるものもある。さらなる丁寧な考察を要するが、医学用語における日中の影響関係を見ると、1873年時点では中国が日本に影響を及ぼした可能性のみを指摘できるものの、日本から中国への影響は否定的と言うほかない。しかし、一部《醫學英華字釋》に先行する日本語の用例もあり、しかも日中同形同義語であるため、果たして1858年以前に医学分野で日本語借用語があったのかについては興味がある。

ところで、本稿では「語基」の概念を取り入れて、医学語彙の考察単位としているが、その定義についてみてみよう。日本語の研究において「語基」を使用し始めた1970年代から1980年代にかけての3氏の説明をここに引用する。

宮地裕(1973)は「現代漢語の語基について」で以下のように述べている。

語基とは、語の構成に意味的基幹としての役わりを果たすものの意であるが、基幹と基幹でないものとの区別は、これが意味にかかわる概念であるだけに明確でないところをのこす。〈中略〉語根・語幹は、活用する語に典型的にあらわれ、語根は音声形式の不変化部分、語幹はそれに母音交替のくわわったものと規定するが、語基とは観点をことにする用語である。〈中略〉語基は語の意味的基幹であり、語を前提とする概念あるいは予想する概念だからである。

野村雅昭(1976)は「現代漢語の語構成について」で以下のように述べている。

「語基」とは、「語」の意味的な中核をなす部分という程度に解釈してさしつかえない。必要があれば、名詞性語基、動詞性語基というようにいうこともできる。以下では、ここで問題にする二字漢語や一字漢語を、それぞれ複合語基、単純語基のように呼ぶことにする。

森岡健二(1984)は「形態素論 語基の分類」で以下のように述べている。

日本語で普通という体言や用言は、BlochやTragerのいう「第一種・語基」に相当し、語の構成要素として働いている単位であると見られる。〈中略〉和語系形態素と著しく異なる点というのは、「語基」「屈折辞」「派生辞」という三種の形態素のうち、漢語・外来語は屈折辞をもっていないということである。〈中略〉音と訓は同一語基の異形態(allomorph)の観を呈する。

そして、『醫語類聚』の語彙を語基に分解し、分析を加えた高野繁男(1985)は、語基について次のように説明している。

術語には「春夏秋冬」のような並立形式の語はほとんどなく、各構成要素が承接の関係で結合している。そして、すべての術語の基本となり、かつ造語要素として機能しているのは1字漢語、2字漢語、3字漢語である。これを術語の「基本単位」と呼ぶことにする。4字漢語以上は「2字漢語+2字漢語」(発育+機能)、「2字漢語+3字漢語」(血液+循環論)というような構造になっている。ただ、このうち3字漢語は、

たとえば「循環・論」「視・神経」のように、さらに分解できる。「循環」「神経」は2字漢語、「論」「視」は1字漢語である。このようにみえてくると、3字漢語は基本単位として認められるが、語の構成要素としては、1字からなる要素と2字からなる要素ということになる。このようにして得られた要素のことを「語基」(stem)と呼ぶことにする。〈中略〉

なお、2字漢語の語基には、さらに1字ずつに分解可能なものと分解不可能なものがある。

[分解可能な語基] 出-血 静-脈 売-薬 離-乳

[分解不可能な語基] 精神 蛋白 発作 葡萄

和語語基はすべて分解可能であり、外来語語基はすべて分解不可能である。分解可能な漢語の語基は、それに用いられる漢字が2字とも、あるいは1字が訓をもっていることが原則で和語的である。

また、高野繁男(2002)は近代の翻訳において新しく造語する方法について解説する際に、「原語を造語要素である語基(stem)に分解し、その語基に漢語である漢字を当ててゆく方法である。この訳語法は、蘭学時代に開拓され、近代語、とくに医学や理系の語彙を中心に活用された」と述べている。

以上のことから「語基」とは語の意味的な中核をなす、語の構成要素であり、新語を創出する際の造語要素である、と言える。本稿では論じることができなかったが、医学用語を2字語基まで分解することにより、日中両語に共通する語基の造語要素としての働きの異同も分析でき、またその2字語基が自立語基の場合の意味・用法と前接または後接語基になる際の働きにおいて日中差が生じるのかなどの分析も可能である。これは今後の課題としたい。

2. 『醫語類聚』と《醫學英華字釋》に共通する語基

本稿では高野氏の分析に従い3字以上の医学用語はすべて2字語基または1字語基に分解して「語基」を単位に考察を加える。高野(1985)は『醫語類聚』の語基を以下の基準で抽出し、分類している。

- ・句形式は採集対象外とする
- ・語基の出自を和語語基、漢語語基、外来語語基に区分する
- ・語基の字数は1字または2字を基本とし⁴、外来語語基はこの限りではない
- ・語基の機能を自立語基、結合語基(前接、後接)に区分する
- ・語基の品詞性は体言、用言、様態の3種に区分する

ここから、1字語基290、2字語基2110(うち和語語基65)、外来語語基127の合計2527

⁴ 2字語基はさらに「1字語基+1字語基」に分解可能なものもあるが、本稿では2字語基を優先しそれ以上分解していない。

の語基を抽出した。

| | | 『醫語類聚』の 語基の数 | 《醫學英華字釋》の 語基と一致する数 |
|-------|------|-----------------|-----------------------|
| 1 字語基 | | 290 | 151 |
| 2 字語基 | 漢語語基 | 2045 | 234 |
| | 和語語基 | 65 | 8 |
| 外来語語基 | | 127 | 0 |

ちなみに、語基に分解することなく、英語見出しに対応する訳語の異同を見ると、『醫語類聚』見出し語 6246 項目、《醫學英華字釋》1944 項目のうち両書で一致するのは 89 語のみである。

以下に《醫學英華字釋》の医学用語と一致する語基を挙げる。

2. 1 1 字語基 151 個

ここに示すのは『醫語類聚』と《醫學英華字釋》で共通する語基のうち、1 字の自立語基もしくは 3 字以上の医学用語から分解して得られた 1 字語基である。

白 薄 胞 背 鼻 病 不 腸 赤 瘡 唇 醋 大 袋 膽 刀 底 點 頂
 動 毒 對 法 肺 粉 干 肝 齋 根 骨 管 寒 汗 核 黑 後 化 花
 廻 火 劑 機 假 間 肩 脚 膠 椒 結 節 筋 鏡 頸 精 酒 尻 殼
 孔 口 狂 痢 力 裂 淋 鈴 瘤 輪 馬 盲 門 面 囊 腦 內 膿 瘡
 皮 脾 片 臍 器 鉛 輕 球 熱 仁 人 肉 軟 散 疔 上 傷 舌 聲
 識 時 視 書 水 死 酸 髓 所 胎 糖 桃 體 鉄 銅 痛 頭 脫 外
 腕 彎 網 味 物 下 線 香 小 形 性 胸 穴 血 炎 眼 藥 腰 夜
 葉 衣 醫 銀 硬 油 右 圓 原 症 質 痔 脂 汁 腫 肘 足 左

これらの語基が日中間で機能に相違があるのかは別稿で論じたい。

2. 2 2 字語基 234 個 (漢語語基のみ)

ここでは《漢語大詞典》の見出しにある語や《四庫全書》に用例のあるものを、伝統の中医学でよく使うものとその他に分けて示す。

まずは中医学でよく使うもの。

白帶 薄荷 薄膜 脾胃 鼻孔 鼻竅 變大 變軟 變質 腸膜 橙皮 傳染 大便
 大黃 胆管 胆囊 胆汁 倒睫 凍瘡 斷骨 多血 額骨 呃逆 兒頭 耳下 發背
 發汗 發狂 發熱 翻轉 放血 肺病 肺勞 肺胃 肺血 粉末 風氣 婦人 腹痛
 蓋骨 甘草 肝胆 干莖 橄欖 肛門 骨骼 骨瘤 骨盤 骨髓 骨質 桂皮 龜頭
 琥珀 呼氣 呼吸 灰白 蛔蟲 茴香 會厭 霍亂 脊骨 脊髓 肩胛 接骨 結喉
 筋衣 精囊 精神 精液 咀嚼 口唇 胯骨 潰爛 老人 淚管 硫黃 顛頂 蘆薈

鹿角 癩癧 迷蒙 腦髓 膿瘡 努肉 暖胃 嘔吐 脾病 葡萄 氣管 情欲 顛骨
 熱病 人參 人身 肉瘤 乳管 乳頭 乳香 乳汁 傷風 上口 聲音 生育 石灰
 石淋 食指 受胎 手掌 水泡 水疝 水銀 水腫 死骨 死肉 四肢 藤黃 頭骨
 頭皮 頭痛 禿瘡 脫肛 外層 外科 外皮 外傷 腕骨 胃病 胃痛 胃血 尾骶
 膝蓋 下墜 顯微 消化 小便 小腸 小蟲 小兒 小管 小腦 小頭 心胞 額門
 胸部 胸骨 虛弱 血毒 血管 血力 血瘤 血中 牙關 眼眇 眼科 藥品 咬傷
 嬰兒 硬齶 幽門 魚膠 月經 直腸 指骨 趾骨 植物 止血 脂瘤 腫大 中酒
 子宮 (169)

次に、その他のもの。

半月 保護 撥下 不動 不全 不正 成形 淡黑 巔頂 風雨 機器 空氣 狂犬
 連合 流出 器械 全身 軟曲 三角 上升 十二 水浸 送入 太陽 吐出 無名
 壓重 言語 養育 飲食 用法 運動 知覺 知識 周圍 總管 (36)

そして、『漢語大詞典』に収録されていない、もしくは典拠を提示していない上に、『四庫全書』にも用例がなく、近代新語である可能性が高いものとして以下がある。

袋瘤 腸炎 肺炎 肝炎 骨炎 乳炎 脾炎 舌炎 眼炎 白椒 大脳 胆管 肺質
 假瞳 淚囊 脉管 腦水 腦炎 内皮 牛痘 氣胞 皮病 上顎 實質 胎盤 套管
 胃炎 眼球 坐骨 (29)

このように見ると、『醫語類聚』と《醫學英華字釋》で共通するものは、中国語の既存語が大半を占め、西洋から伝来した医学知識を翻訳するために新たに創造した近代医学新語は少ないとわかる。

また、「小頭、血管、血力、總管、筋衣、精神、空氣、實質」などは明らかに既存の語義と異なっている。さらに、「筋衣、精神、實質」は既存の語義と異なるだけではなく、『醫語類聚』と《醫學英華字釋》の間でも意味が異なる。以下に両書それぞれの原語との対訳関係もあわせて、「語基 《醫學英華字釋》/『醫語類聚』」のように列挙し、既存語義との相違を考察する。

小頭 なし/ capitulum; nanocephalus (小頭畸形)
 血管 blood-vessels; valves; veins/ haematites ; exangia (血管膨大) など
 血力 tonic (補血力) / haemodynamometer (血力驗器)
 總管 great vein ; duct / duct ; choledoch (輸胆總管) など
 筋衣 membrane / myolemma
 精神 spirits / delusion (精神錯亂) ; emotion (精神感動) など
 空氣 air / ventilation
 實質 solid; solidy / stroma

1) 小頭

《漢語大詞典》(以下《漢大》と略す)は「1. 尖頭。唐白居易《上阳白发人》 2. 两头粗细不同的棍棒的细头。《旧唐书·刑法志》 3. 賭博时的少量抽头钱。清李渔《连城璧》外编卷四 4. 旧时的一种银币, 因币面上的头像略小, 故名。 5. 整体中的小部分。《人民日报》1984. 8. 3」と5つの語義項目と典拠を挙げている。

《醫學英華字釋》(p19)は大腸についての解説で「Its worm-like appendage.」を「上廻小頭如蠅尾」と対訳し、《漢大》の「1. 尖頭」または「2. 两头粗细不同的棍棒的细头」の意味で用いている。

『醫語類聚』はcapitulumを「小頭」(p34)と訳し、現在も上腕骨小頭をcapitulum of humerusと訳すように既存の語義で使うこともあれば、nаноcephalusの対訳が「小頭畸形」(p169)であるように既存語義とは異なる例も見受けられる。

2) 血管

《漢大》は「血液流通的管道。分为动脉、静脉和毛细血管三种。茅盾《虹》」と典拠が遅い。しかし、生薬の一種として《證治準繩》に「帶血管鵝毛」、《御纂醫宗金鑑》に「血管鵝毛」とあり、今で言う「血管」とは異なるのだろう⁵。

《醫學英華字釋》は「Blood-vessels and nerves.」を「肉中血管腦氣筋」、「Capillaries or very minute vessels.」を「微絲血管」(p6)、「In its folds are many blood-vessels and lacteals.」を「膜間多血管吸液管」(p19)、「The great vessels enter at its base.」を「總血管出入心底」(p23)、「Each lobule has air and blood-vessels.」を「小葉皆有氣管血管」(p25)、「The renal blood-vessels.」を「内腎血管」(p28)などと訳し⁶、「血管」を「Blood-vessels」や「vessels」の訳語としている。

『醫語類聚』は「exangia」を「血管膨大又破裂」(p96)、「haemadonosus」を「血管病」(p116)、「haemadostosis」を「血管化骨」(p116)、「haematangionosus」を「血管病」(p117)、「haematites」を「血石又血管」(p117)、「haemodrometer」を「測血管(血行ノ速力ヲ測ル器)」(p119)、「pneumathaemia」を「血管醗氣」(p204)と訳している。

3) 血力

《漢大》は「犹血汗。《辛亥革命前十年间时论选集·论中国商业不发达之原因》」のように1項目の語義のみを示し、《醫學英華字釋》(p19)の「Tonic」を「補血力」と訳した「血

⁵ 「帶血管鵝毛」や「血管鵝毛」の「血管」の具体的な意味は分かりかねるが、換羽などで自然に抜け落ちた羽ではなく、表皮から抜き取ったものという意味かと推測する。

⁶ このほかに「Coats of blood-vessels.」を「血管之體三層」(p8)、「Blood-vessels and nerves of the eye.」を「眼中血管腦氣筋」(p12)、「Vessels enter by a transverse fissure.」を「脾横縫血管所出入」(p21)、「The heart has its own nourishing vessels.」を「心本體養血管」(p24)、「Where it doubles on itself, the air and blood-vessels enter.」を「翻轉處氣血管所入」(p24)、「The spermatic cord.」を「外腎精管血管」(p28)と訳した例もある。

力」や、『醫語類聚』の「haemodynamometer」今で言う血圧計を「血力驗器」(p116)と訳した「血力」とは語義が異なる。

4) 總管

《漢大》は「1.官名。地方高级军政长官。三国魏黄初年间始置都督诸州军事，北周武成元年(559年)改为总管。……2.官名。军事长官。隋及唐初有行军总管、行军大总管，是出征时的军队主帅。……3.官名。管理专门事务的行政长官。元代中央和地方有各种名目的都总管府或总管府……4.指总管事务的管家。茅盾《子夜》……5.全面管理。」のように役職を指す名詞の意味を挙げている。

《醫學英華字釋》は「Pulmonary artery.」を「心肺廻血總管」(p6)、「Superior vena cava or great vein.」を「上廻血總管」(p8)、「Inferior vena cava or great vein.」を「下廻血總管」(p8)、「The thoracic duct.」を「吸液總管」(p8)、「They join and form the thoracic duct.」を「衆管合爲吸液總管」(p22)、「Heart diseases of similunar valves.」を「總管三半月門病」(p37)とそれぞれを訳しているように、「總管」を太い血管や太いリンパ管を指す語として使用している。

『醫語類聚』は「choledoch」(p43)、「Communis Choledochus duct」(p52)、「Duetus comminis chole dochus」(p78)を「輸胆總管」、「choledochitis」を「輸胆總管炎」(p43)、「hepatocystic duct」を「肝胆管(即ち總管)」(p122)と訳し、『醫學英華字釋』と同じように「總管」を太い管の意味で使っている。

5) 筋衣

《漢大》はこれを収録していない。《竹嶼山房雜部》で橙饅の作り方についての解説に“用黄橙皮去筋衣作沸湯燻之……”と見え、柑橘類の内側にある白い筋のことを指している。

《醫學英華字釋》(p11)は眼の構造について説明する際に、「The retina or nervous membrane.」を「腦筋衣」と訳し、語基に分解して対訳関係を示せば membrane が「筋衣」に当たるとわかり、現在の膜または膜組織の意味で使われている。ほかにも2回 retina を「腦筋衣」と対訳させている⁷。

『醫語類聚』(p168)は「筋衣」を myolemma の訳語とし、現在の筋細胞膜のことを指す。このため既存語義と異なるだけでなく、『醫學英華字釋』の用法とも異なる。

6) 精神

《漢大》は「1.指人的精气、元神。相对于形骸而言。《吕氏春秋·尽数》 2.指人的意识。

⁷ 《醫學英華字釋》は「The iris or curtain protects the retina.」を「眼隔簾保護腦筋衣」(p12)、「The image or object is painted on the retina.」を「光影映於腦筋衣如畫」(p13)と漢訳している。

《史记·太史公自序》 3. 犹实质，要旨。事物的精微所在。宋王安石《读史》 4. 精力体力。
《韩诗外传》 5. 形容人或物有生气。《世说新语·言语》 6. 心神；神志。指神情意态。战国楚宋玉《神女赋》 7. 风采神韵。宋周美成《烛影摇红》 8. 精明；机警。《宋书·谢弘微传》 9. 神通。《西游记》 10. 哲学名词。指人的意识、思维活动和一般的心理状态。」と多くの語義について典拠も挙げているが、近代新語としての語義「指人的意识、思维活动和一般的心理状态」の典拠は提示していない。

《醫學英華字釋》(p17) は「Fragrant odours refresh the spirits.」を「臭美補精神」と漢訳し、「精神」は「spirits」に当たる⁸。香りがもつ心理的なよい効果を説明している。

『醫語類聚』は「delusion」(p68)、「ecnoea」(p81)、「hallucination」(p119)、「mania」(p157)、「vesania」(p263)を「精神錯亂」、「emotion」を「精神感動」(p85)、「oligopsychia」を「精神虚弱」(p177)、「phrenica」(p200)、「psychosis」(p210)を「精神病」、「psychiatria」を「精神病治法」(p210)などと訳しているように、新しい意味で使用している。

7) 空氣

《漢大》は「1. 亦作“空炁”。道教谓元气，清气。宋苏轼《龙虎铅汞论》 2. 弥漫于地球周围的混合气体。主要成份是氮、氧等。巴金《利娜》 3. 指气氛。刘半农《拟装木脚者语》 4. 指舆论、消息或谣言。瞿秋白《饿乡纪程》」とし、「2. 弥漫于地球周围的混合气体。主要成份是氮、氧等。」の典拠は《醫學英華字釋》と『醫語類聚』のどちらよりも時代が遅れる。

《醫學英華字釋》(p15) は「Sound is produced by vibration of the air.」を「空氣搖動而爲聲」と訳し、airに「空氣」を当てている。

『醫語類聚』は「aerology」を「空氣論」(p6)と訳すほか、「efflorescence」を「發疹又固形體ノ空氣ニ觸テ粉末狀ニ成ルコト」(p82)、「pneumometry」を「肺中空氣ノ容量ヲ測ルコト」(p204)、「respirator」を「冬月室内ノ空氣ヲ溫暖ニスル器」(p217)、「ventilation」を「空氣ヲ開達スルコト」(p261)と訳し、新語の「空氣」を使用している。

8) 實質

《漢大》は「本质；事物、论点或问题的实在内容。闻一多《说舞》」のように語義を1つだけ示し、典拠も遅い。

《醫學英華字釋》(p73) は「Bodies are either solid, fluid, or aeriform.」を「物分實質水質氣質」、「Solidly by increase of heat may be changed into fluids.」を「實質添熱變爲水質」と訳し、「實質」をsolidまたはsolidlyと対応させ、今で言う個体の意味で使っている。

⁸ 《醫學英華字釋》にはもう1つ「Stimulant」を「補精神即補火」と訳す例もあるが、ここの「精神」は既存の語義「4. 精力体力。」に最も近いと思われる。

『醫語類聚』は「stroma of ovary」を「卵巢實質」(p238)と訳し、ここでstromaと「實質」を対応させている。stroma of ovaryは現在では卵巢支質と訳されるが、stromaに対応する訳語の1つに角膜實質があるため、「實質」という訳語は現代にも引き継がれているとわかる。

2. 3 2字の和語語基8個

日本語の視点からは「訓」を含む語基を高野(1985、2002)は和語語基に分類し、漢語語基とは区別している。次の8つがある。

大麥 大人 大蒜 耳輪 火傷 睫毛 小骨 圓鋸

どれも中国語でもそのまま使える既存語ばかりであるが、「圓鋸」のみ《漢大》や《四庫全書》にも用例がなく、《近現代漢語辭源》(2020)もまた呂珮芬《東瀛參觀學校記》(1908)を最初の典拠に挙げるに留まる。次節でも触れるように《醫學英華字釋》と『醫語類聚』の使用例は先行研究よりも早い用例を提供できる。

3. 『醫語類聚』と《醫學英華字釋》より早い用例

前節では《漢大》や《四庫全書》で《醫學英華字釋》より早い用例を確認できない語彙を近代新語の可能性があると指摘したが、そのすべてが《醫學英華字釋》の初出とは限らない。少なくともホブソン《全體新論》(1851)に「大脳、胆管、淚囊、脈管、上顎、胎盤、小腦、血管、眼球、坐骨」があり、ホブソン《西醫略論》(1857)に「袋瘤、腦炎、内皮、」の用例がある。また、《醫學英華字釋》と同じ年に刊行された《内科新説》(1858)に「腸炎、肺炎、肝炎、胃炎」がある。《六合叢談》(1857)に「空氣」がある⁹。

中国側の文献に《醫學英華字釋》より前の用例があるように、日本側についても気になる指摘がある。《新华外来词词典》(2019)は日本語借用語を「准外来词」と位置づけ非常に重要視しているが、その記述によると「淚囊」は1774年、「小腦」は1798年、「脈管」は1810年、「肝炎、腦炎」は1872年とそれぞれ日本語における早期の用例を提示し、そのいずれもが《新华外来词词典》が提示する中国語での初出時期より前であることを明示している。それが和製漢語であり、かつ中国語がそれを借用した可能性を明言はせずとも典拠の年代から肯定しているとわかる。

また、「脈管」については「日文見1810年、1811年书证。有学者认为可能是中日各自创制，并非自日语引进。存此待考。」と中日両語の語誌に踏み込んだ見解を述べている。これは近代の医学用語の発展史において日中双方が干渉されずに独自発展していた時期があり、訳語が偶然にも日中同形語となった例があることを認めようとする見解である。

⁹ これらの典拠はすべて《近現代漢語辭源》(2020)を参照した。なお、《近現代漢語辭源》が提示する出典が《醫學英華字釋》より遅い例に「胆囊、額骨、精囊、淚管、氣管、胸部、脂瘤、圓鋸」がある。

4. おわりに

本稿で提示した内容から以下のことが指摘できる。

(1)『醫語類聚』と《醫學英華字釋》で使用された医学用語を語基に分解し、比較することで、見出し語のままの術語では見えてこない両書の類似点を、語基により見出すことができた。

(2)『醫語類聚』と《醫學英華字釋》で共通する2字語基は既存語が中心であり、中医学の用語として使われてきた伝統的な語が多かった。

(3) まだ精査を要するが、《醫學英華字釋》は1851年～1857年の新語を継承しつつ、さらに独自の訳語(新語)を創造していたと考えられる。

(4)《醫學英華字釋》の訳語が日本語に借用された可能性は否定できないが、その総量は少数だった可能性がある。

(5) 近代新語の成立過程における日中語彙の相互影響関係は、学術分野により異なることを示唆している。例えば、法律用語は「中→日→中」のように明治以前は中国の書物や語彙が日本に流れてきており、明治後期に日本からの逆輸入が増大したが、近代医学語彙では「(中→)日→中」のように、語彙の面では既存語を除き、日本語の近代医学新語はほとんどが自前の訳語であり、明治以降は日本から中国へほぼ一方通行に逆輸入されることになるのではないだろうか。

現状は2書を比較したに過ぎず、このような結論を導くには説得力に欠けるため、今後は《醫學英華字釋》と『醫語類聚』が成立するまでの日中双方の医学語彙の変遷を整理し、中国語から日本語が受けた影響と中国語が借用した日本語借用語を丁寧に考察したい。

参考文献

Benjamin Hobson 1858 *A Medical Vocabulary in English and Chinese* (《醫學英華字釋》) Shanghai Mission Press

奥山虎章 1873 *A Medical Vocabulary in English and Japanese* 『醫語類聚』 名山閣

宮地裕 1973 「現代漢語の語基について」 『語文』 (31)

野村雅昭 1976 「現代漢語の語構成について」 『情報管理』 18(11)

森岡健二 1984 「形態素論 語基の分類」 『上智大学国文学科紀要』 (1)

高野繁男 1985 『『医語類聚』の語基と語構成』 『明治期専門術語集 I 医語類聚』 有精堂

高野繁男 2002 『近代漢語の研究：日本語の造語法』 明治書院

羅竹風主編 1986-1994 《漢語大詞典》 上海辭書出版社、漢語大詞典出版社

上海人民出版社、迪志文化出版有限公司 1999 「文淵閣四庫全書電子版」

史有为主編 2019 《新华外来词词典》 商务印书馆

黄河清編著 2020 《近现代汉语辞源》 上海辞书出版社